様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０１１６８

研究課題名（和文）生活様式の国民的均質化の下での民族意識の行く末を見通す実証研究

研究課題名（英文）Anthropological Research on Ethnic Identity under the Spreading Indonesian National Identity

研究代表者
鏡味　治也（Kagami, Haruya）

金沢大学・人間社会研究域・客員研究員

研究者番号：２０２２４３３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　まずインドネシア全国民の民族帰属のデータが個人レベルで把握できる2000年センサス原データを入手し、全データをエクセル・データに落とし込んでデータベース化した。これはインドネシア各地住民の村レベルでの民族混淆状況や異民族間婚の割合をあぶりだすデータ源として、その後の現地調査や調査報告の際に活用した。
　また国内移民の多いランプン州都、バリ人の卓越するバリ州都、ジャワ人ヒンドゥー教徒の暮らす東ジャワ州ルマジャン市、多民族が暮らす南スラウェシ州都、首都ジャカルタおよび西ジャワ州都を訪れ、小学生を対象とした民族意識アンケートを実施するとともに、移民村の運営、慣習についての聞き取り等を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究でデータベース化したインドネシア2000年センサス原データは、民族帰属が問われた最初のセンサスであると同時に、全国民の個人レベルの回答が閲覧できる唯一のデータであり、その後のセンサス原データが一般に公開されていない状況を鑑みると、今後のインドネシアでの民族意識の変化を探るうえで真に貴重なデータとなると自負する。
　また各地で小学生を対象に行った民族意識アンケートは、インドネシアの人びとの民族意識の変化を見通す試みのひとつとして、今後の研究の手がかりとなることを期待する。多民族国家インドネシアも建国80年にならんとし民族差異が低減する中で、民族意識はインドネシア理解の鍵となる。

研究成果の概要（英文）：This research has arranged the Indonesian 2000 census data into excel file database. The 2000 census was the first one to ask ethnic attribution since the independence of the Republic of Indonesia and is the only one to open the original data to be accessible. My arranging excel database must be an important data for future research on ethnic identity in Indonesia.
 This research also conducted field survey and collected questionnaire in several elementary schools in the Province of Lampung, Bali, East Jawa, South Sulawesi, Jakarta and West Jawa. The survey shows the increasing using of the national language in daily life, the nationally homogenizing lifestyle, and still the maintaining ethnic custom tradition especially in the case of minority condition. The questionnaire survey in elementary school would be a traial to foresee the future ethnic identity in Indonesia.

研究分野：文化人類学

キーワード：民族意識　国民意識

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

20 世紀に独立を果たした新興国はおしなべて多民族国家であり、1945 年に共和国として独立宣言したインドネシアも例外ではない。多様性の統一を国是とするインドネシアは、独立以来国内の多様な民族伝統を尊重しつつ、それを包含しまとめ上げる国民文化の建設に注力してきた。1981 年以来 40 年以上にわたりインドネシアで文化人類学調査を行ってきた本研究代表者は、当初まだ民族伝統の色濃かったバリ島村落部での住み込み調査から始めて、バリ島の都市部や村落観光地、さらに首都ジャカルタやそれ以外のインドネシア国内地域で随時観察と資料収集を積み重ねながら、国内各地で共通の近代的な生活様式の普及、民族語に代わる国語のインドネシア語使用の常態化、異民族間婚の増大などによる、民族差異の希薄化の進展を実感してきた。

その一方で、1990 年代前半から本格化する国の観光振興政策では多様な民族伝統がアピールされ、またスハルト大統領退陣を受け地方自治推進を旗頭にした 2000 年代初頭の政治変革期以後は、民族帰属がとくに地方での選挙に大きく影響するようになるなど、政治経済の分野では民族差異はいぜん重要な意味をもつ要素として扱われている。

こうした中、2000 年センサスで建国以来初めて民族帰属が問われ、統計データで民族趨勢やその混淆状況を確認、検証することができるようになった。生活実態としての民族差異が希薄化する一方、その記号的なアピールが観光や政治の場面で喧伝される中、統計データと突き合わせながら人びとの民族意識の如何とその重要性を探る下地が整った状況にあったといえる。

２．研究の目的

本研究は、現代のインドネシアの人びとにとって、民族帰属がどの程度の重要性をもち、それがどういった契機で発動し強まるのかを探求し、実体としての民族差異を所与の前提としない、一般人の生活実態に根差した民族論の構築に寄与することを目的とした。現代のインドネシアの状況では、民族帰属はかつてのようなひとりの人のアイデンティティ全体の基盤となるようなものではなくなり、「インドネシア国民」や「イスラーム教徒」といった自己規定と並列されるものである。そのなかでそれが重視されるとすれば、それはどう生きどう死ぬかという個人の生き方の指針を与えるものとしてだろうという展望のもとに、どういう場面で民族意識が重視されるのかをインドネシア各地で実地検証することを研究課題とした。

３．研究の方法

本研究の研究方法としては、さまざまな民族状況にあるインドネシア各地の人びとを対象にした聞き取りと、統計データの収集・整理を同時並行で進めることにした。

聞き取り対象としては、本研究代表者が長年研究対象としてきたバリ島の村落部と都市部を特定民族（この場合はバリ人）が卓越して暮らす地域の代表として選んだほか、そのバリ人が国内移民として多く暮らすスマトラ島南端のランプン州、多くのバリ人と同じヒンドゥー教徒のジャワ人が暮らす東ジャワ州ルマジャン県、そして民族混淆の地の代表である首都ジャカルタを選んだ。地域の主要民族をなす人びと、地域で少数派の移民として暮らす人びと、同じ宗教を信奉しながら民族慣習が異なる人びと、そして民族混淆の地で暮らす人びとという、それぞれ異なる民族状況を想定した選択である。

統計データについては、2000 年センサスの原データを京都大学東南アジア地域研究研究所が保有していることは把握していた。このデータを貸与もしくはコピーさせてもらい、扱いやすいファイルに変換することで、データ処理が簡便な基礎データとして整理・保管することを目指した。

４．研究成果

(1)　バリ島での実地調査

バリ島では州都デンパサールの中学生を対象に、民族意識に関するアンケート調査を行ったほか、都市部住民および村落部住民に聞き取りを行った。アンケートでは父母や自身の民族帰属のほか、家庭内でどんな言語を用いるかや、祭礼や服装、言語などどんなときに自らの民族帰属を意識するかを聞いた。異民族間婚の両親をもつ生徒は 50 人中 6 人いたが、父親の 46 人、母親の 47 人はバリ人で、自身もバリ人と答えた生徒は 48 人だった。いっぽう家庭内でバリ語を使う生徒は 10 人に対してインドネシア語は 42 人（一部はバリ語と併用）と、両親ともバリ人の生徒が多いにもかかわらず民族語の使用は少なかった。どんなときに民族を感じるかの問いには、慣習儀式に参加するときが 25 人、次いで民族語の使用（家庭内に限らず）が 22 人と多かった。

バリの小中学生の使用言語については、2007 年に村落部と県都、州都でアンケート調査したことがあり、村落部ではバリ語、県都の小中学校と州都の小学校ではバリ語とインドネシア語が

半々、州都の中学校ではインドネシア語が多いという結果を得た（Kagami 2012）。バリのような主要民族（バリ人）の人口比率が高い地域でも、村落部はともかく多民族混住が進む州都では民族語の使用は減少し、今回のアンケート結果もそれを示す。家庭内での使用が少ないにもかかわらず、民族を意識する主な契機のひとつであるとする中学生徒の答えは、民族語の使用もまた生活実態から離れて記号化しつつあることを示す。

(2)ランプン州での実地調査

バリ人の移民も多く暮らすランプン州では、バリ人の作る移民村のほか、州都バンダル・ランプンでバリ人移民が建てたヒンドゥー寺院を核に集まるヒンドゥー教徒組織についても聞き取りを行った。あわせて移民村と州都のヒンドゥー寺院近くの小学校で民族意識のアンケート調査を実施した。

ほぼバリ人で構成された移民集落は、バリ島の伝統的な慣習村を模した地区組織がつくられ、あたかも移植されたバリ村落のように運営されている。アンケートの回答でも家庭内言語はほぼバリ語で、民族を意識する契機は宗教祭礼が 76 人中 26 人で最も多く、次いで民族衣装が 19 人、民族語の使用が 17 人だった。

州都バンダル・ランプン市内ではバリ島出身者は少数で散在して暮らし、ヒンドゥー教寺院での祭礼に集まる程度である。その人たちがつくる組織は祭礼や冠婚葬祭の相互扶助組織で、首都ジャカルタのバリ人ヒンドゥー教徒を中心に作られた組織（鏡味 2012 参照）に類似するが、ジャカルタのそれがバリ人以外のヒンドゥー教徒も少数ながら含むのに比べ、バンダル・ランプン市のそれは寺院に隣接する墓地に（バリ出身ながら改宗した）キリスト教徒やイスラーム教徒向けの墓地も併設するなど、よりバリ島出身者を念頭に置いた組織となっている。この村落部と都市部で対照的な移民先での組織作りについては、現地で同行した研究協力者と共著で研究論文に仕立て、国際雑誌に投稿中である。

なおアンケートを実施したバンダル・ランプン市内の小学校は、バリ人生徒がごくわずかだったが、ジャワ人移民の子供が約半数を占め、家庭内言語は圧倒的にインドネシア語で、民族を意識する契機は 77 人中 47 人が民族語の使用、24 人が慣習儀式への参加という回答だった。

(3)東ジャワ州での実地調査

東ジャワ州ルマジャン県の県都ルマジャン市郊外にも、バリ人の肝いりで建てられたヒンドゥー寺院があり、祭礼時にはバリ島からも多くの人が参拝に訪れるが、近隣にはジャワ人ヒンドゥー教徒が少数ながら暮らしている。実地調査ではこの寺院の寺院祭司を務めるジャワ人ヒンドゥー祭司に、寺院での祭礼だけでなく、近隣のジャワ人ヒンドゥー教徒がまとまって暮らす集落での共同祭祀の様子やその発展の歴史、そしてジャワ人ヒンドゥー教徒の通過儀礼について聞き取りをした。

64 世帯中 25 世帯がヒンドゥー教徒のその集落には、ヒンドゥー教徒のための礼拝所が建てられ、満月と暗月の夜の定期的な共同礼拝やヒンドゥー教の講習会が行われており、インドネシア各地の都市部に建てられたヒンドゥー寺院での活動に類似する。しかし誕生前後や死後の通過儀礼のあり方は、バリ人のそれよりもジャワ人一般のそれを踏襲しており、同じヒンドゥー教徒でも民族慣習の違いが表面化している。この点についてはインドネシア研究者の集まりであるインドネシア研究懇話会の 2022 年研究大会で口頭発表した。

(4)南スラウェシ州での実地調査

当初の予定以外に、南スラウェシ州の州都マカサル市そのほかを訪れ、伝統家屋や木造船などの民族表象を見聞するとともに、マカサル市内の小学校でアンケート調査を行った。アンケート結果では、家庭内言語はインドネシア語が圧倒的で、民族を意識する契機は 79 人中 59 人が民族語の使用、16 人が慣習儀式への参加という回答だった。

(5)ジャカルタおよび西ジャワ州バンドン市での実地調査

首都ジャカルタおよび西ジャワ州の州都バンドン市では、異民族間婚の家庭の聞き取りを行うとともに、ジャカルタ近郊のキリスト教会での日曜礼拝を見学した。ジャカルタやバンドンのような大都市の異民族間婚家庭では、家屋内で目立った民族表象は見当たらず、使用言語はインドネシア語で、参加する行事やその際の衣装から民族帰属がうかがわれる程度である。また礼拝を見学したキリスト教会は、特定の民族を対象としたものではなく、礼拝の様子もキリスト教プロテスタントの一般的な礼拝に従ったもので、参列者の衣装も特定の民族色に彩られたものではなかった。

(6)2000 年センサスのデータ収集と整理

京都大学東南アジア地域研究研究所が保有する 2000 年センサスの原データは、今研究期間の

当初に電子データのコピーが許されて当研究での活用が可能になった。さっそく Access ファイルに納められていた原データを Excel ファイルに移し替え、データ処理をしやすいようにした。

2000 年センサスはインドネシア建国以来初めて民族帰属を問うたセンサスで研究者の関心を集めたが、インドネシア統計局から公刊されたデータは州・県レベルの集計結果で、民族分布に関しては各地区の 10 位までの民族名しか記載されておらず、それ以上の詳細を知ることができなかった。いっぽうこの原データは世帯ごとのデータが質問票の回答のまま並べられており、世帯レベルや集落/町区レベルの生活状況把握が可能である。たとえば世帯主と配偶者の民族帰属を見れば異民族婚かどうかがわかり、その子が両親のどちらの民族帰属を継承しているかも知ることができる。そうしたデータを州・県のみならず集落/町区レベルで集計することができ、統計資料としてたいへん貴重である。

さっそく今回の研究で実地調査を予定している地域からサンプル地区を選び、異民族婚について原データを当たり集計したところ、ジャカルタやランプン州都バンダル・ランプンでは地区住民の約 25%、また南スラウェシ州都マカサルでは 17%という数字が出た。これは 2000 年時点での数字なので、それからひと世代経過した現在では、この数字はさらに増加していることが予想される。この結果は異民族間婚の統計データとしては初めての数値であり、インドネシア研究懇話会の 2018 年研究大会で口頭発表した。

原データは民族帰属のほかに年齢、性別、世帯主との関係、宗教、出生地、5 年前の居住地などのデータを含み、集計の工夫次第でさまざまな情報が得られる。その後 2010 年、2020 年にもセンサスは実施されているが、原データのかたちでの販売はなされていないようであり、この 2000 年センサス原データは、学問的に非常に貴重な統計データと言える。京都大学からコピーを許されて入手したこともあり、本研究で Excel ファイルに変換した電子データは一般には公開していないが、個別に依頼のあった研究者には保有元に確認の上データを提供している。

(7)まとめと展望

本研究では研究代表者が長年研究対象としてきたバリ人の動向を手がかりに、本拠地や移民先での状況、また同じ宗教を奉じる他民族との比較、大都市でのあり方など、現代のインドネシアで民族意識がどう発動しているのかを探ってきた。小中学校生を対象に実施したアンケート結果からもうかがえるように、都市部では同じ民族出身の両親の家庭ですら民族語の使用が減り、それの裏返しで民族語の使用が慣習儀式への参加とならんで民族を意識する重要な契機となっている。言い換えれば民族語の使用や慣習儀式への参加は、日常生活の根底ではなくなり、多面的な生活の一部として位置づけられるようになっていると言える。教育や移動の拡大にともなう異民族間婚の増加も考え合わせると、民族アイデンティティは宗教アイデンティティや国民アイデンティティと並立した、状況に応じて選択的に使い分けるものとなっているように思われる。そう考えれば、政治や観光の場面で民族帰属や民族表象が記号的に操作され、また異民族間婚の家庭では母方の集まりに参加するときと父方のそれに参加するときで別々のアイデンティティを意識する、などといったこともごく自然な態度と受け取ることができる。こうした複合的、選択的アイデンティティは現代のインドネシアに限らず、近代化による生活様式の均質化が進み、各種のアイデンティティが錯綜する世界中の現代人に当てはまる。

ただ、選択的ではあっても、それはその人にとって生き方の選択にほかならない。本研究の小中学生アンケートで、慣習儀式への参加が民族を意識する重要な契機との回答を得たが、親に連れられての参加も、成長すれば主体的に参加を選択することになる。慣習儀式には人間観を反映する通過儀礼や人生行路を規定するタイトル儀礼などが含まれ、まさに生き方の選択となる。人生の局面や置かれた状況に応じてどのアイデンティティが重要かは変わりうるが、数あるアイデンティティのどれを死ぬまで保持し続けるかが、その人にとってのいちばん核となるアイデンティティということになる。今後の民族意識や国民性などをめぐる議論は、アイデンティティのこうした選択的性質を念頭に進めていく必要がある。

＜引用文献＞

Kagami, Haruya, “National/ Local Languages and Youth: A Case Study from Bali”, in Foulcher, Keith, Mikihiro Moriyama and Manneke Budiman (eds.), *Words in Motion: Languages and Discourses in Post-New Order Indonesia*, 2012: 173-190, Singapore: nus Press.

鏡味治也、「首都に暮らすバリ人ヒンドゥー教徒」、鏡味治也編『民族大国インドネシア：文化継承とアイデンティティ』、2012 年：285-311 ページ、木犀社

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 鏡味治也
２．発表標題 慣習と宗教のあいだ：ジャワ人ヒンドゥー教徒の通過儀礼をてがかりに
３．学会等名 インドネシア研究懇話会第4回研究大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kagami Haruya
２．発表標題 Anthropological Approach Toward the Field of Design
３．学会等名 The 3rd International Conference on Green Technology and Design 2021（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 鏡味治也
２．発表標題 インドネシア民族（suku）意識の行方
３．学会等名 インドネシア懇談会第１回研究大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関